

[ウズベキスタン]

子どもも大人も 折り紙に夢中！

ウズベキスタンで人気上昇中の折り紙。
折り紙教本の完成で、愛好家は増えるだろうか？

Close Up!

ジャイカの
あしあと



「こんな遊び初めて！ 楽しいね。ここに顔で、丁寧に色紙を折っていくウズベキスタンの子どもたち。参考になっているのは、ウズベク語とロシア語の2カ国語で書かれた折り紙教本だ。」

本の制作を発案したのは、現在「ウズベキスタン・日本人材開発センター（UJC）」で人材育成や文化交流活動に取り組む青年海外協力隊員の福田笙子（しんご）さん。ウズベク語、ロシア語、そして日本語が堪能なUJCのスタッフ、アジザさんと二人三脚で昨年夏から制作を開始した。

折り方の手順を示す絵は、「作り方がより分かりやすいように」と一つ一つ手で描いたが、パソコンでの作業に慣れるまでは易しい作品でさえ苦労したという。線を描いては消し、消しては描いてと、来る日も来る日もパソコンとにらめっこ。全40作品を描き終えたのは開始から3カ月後のことだった。もともとウズベキスタンには色紙を折ったり張ったりして遊ぶ習慣はあったが、一部の人の遊びでしかなかった。しかし、UJCで教室を開いたり、訪問先の学校や

孤児院で紹介したりと、福田さんとアジザさんが日本文化紹介のために折り紙の普及活動を続けるうち、幅広い年齢層の人々に好まれる遊びに。「指先を器用に動かす作業は脳にいい刺激を与える」と障害者施設でも好評だそう。

教本で紹介するのは、かぶとやウサギといった簡単な作品からツルのような複雑なものまでさまざま。完成したばかりの教本を手にしたとき、2人は「まるで私たち子どものようだね」とほほ笑み合った。来館者や教室参加者から問い合わせは多いものの、UJCは出版物販売のライセンスを持たないため本格的な販売活動はこれからのだが、ロシア語も併記されているので、まずは近隣のカザフスタンとキルギスの日本センターへ送ったそうだ。

完成とほぼ同じころ、アジザさんが女の子を出産。ウズベキスタン初の折り紙教本の誕生とともに、UJCは明るいニュースで沸き上がった。

